



Asahikawa Medical University Repository <http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/>

旭川医科大学紀要(一般教育)(2015.3) 第31号:1-10.

朱鶴齡に関する基礎的研究(二) -その著作と交遊について-

江尻 徹誠

Ann.Rep.
Asahikawa Med. Univ.
Vol.31.2015

朱鶴齡に関する基礎的研究（二）
 —その著作と交遊について—

A Basic Study on Zhu He-ling (2)
 --His Writings and Relationships--

江尻 徹誠
 Tetsujo Ejiri

Abstract:

Zhu He-ling was a scholar, which succeeded in the Late Ming and the Early Qing Period. He had extensive interaction with representative scholars in that period, advanced research in the field of literature and traditional study of Five-Classics and wrote many researches.

For all that, in Japanese academic society, he is rarely introduced and thus his energetic activity and the contents of research are barely known. Therefore this writer considered trying the introduction and study on Zhu He-ling's writings.

This research is the second paper of the continuous consideration. First, this writer explains his relationships briefly. Then considered about relationships with "Gu Yan-wu" and "Chen Qi-yuan", Finally gets a stepping-stone toward future research.

キーワード：朱鶴齡、顧炎武、陳啓源、『尚書俾傳』、『讀左日鈔』、『詩經通義』

Key words : Zhu He-ling ; Gu Yan-wu ; Chen Qi-yuan ; Shang-shu Bi-zhuan ; Du-zuo Ri-chao;
 Shi-jing Tong-yi

北海道大學大学院文學研究科専門研究員 e-mail:dirie@zc4.so-net.ne.jp

はじめに

朱鶴齡（一六〇八～一六八三）^{*1}は呉江の人であり、字を長孺という。その愚直なまでに學問に打ち込む姿から愚人呼ばわりされたのを是として、やがて愚庵と號するようになる。^{*2} 明朝と清朝の過渡期である明末清初を代表する學者・文人の一人であるが、彼が生きた時代は、文化・思想など様々な分野で爛熟していた舊王朝である明朝から、異民族による征服王朝である清朝の統治へと移り変わっていく、まさに混亂の時代であった。

この王朝交代にともなう異民族の文化・習俗の流入は、社會および人心に更なる混亂を生み、その受容の是非は當時の中國に生きる人々にとって、まずもって看過できない問題となった。節を曲げず大勢に抗おうとするものもいれば、新たな支配者とその施策を受け入れるものもあらわれたが、朱鶴齡はといえば、前者の立場を堅持する人間であった。文人として、また「遺民」としての活動を続けながら、その中で多くの知友を得、激動の時代を生き抜いていくこととなるのである。彼は、詩文の執筆と讀解といった文學的活動を経て、やがて中國の傳統的學問たる經學研究に没頭し、これらの分野において、『愚庵詩文集』、『易廣義略』四卷、『尚書埤傳』十七卷、『詩經通義』二十卷、『春秋集說』二十二卷、『讀左日鈔』十四卷、『禹貢長箋』十二卷等といった、多くの價值ある研究成果を遺している。^{*3}

この朱鶴齡について、まず拙稿で注目したいのは、彼の同時代における學者達との交遊についてである。彼の交遊關係が實に幅廣く多岐にわたることは、上掲の詩文集や著作等から看取できる。その實状についての研究は、朱鶴齡に関する研究が全體的にそうであるように、現段階では決して多いとはいえないが、例えば周金標氏による一連の研究や、秦輝氏・王建濤氏らの論考^{*4}を参照すると、顧炎武（一六一三～一六八二）や錢謙益（一五八二～一六六四）らのような、當時を代表する様々な士人と交流していたことがわかっている。そこで拙稿では、如上の先行研究をふまえつつ、朱鶴齡の幾人かの知己を取り上げて整理を加えながら、その交遊關係が彼の學術にどのような影響を及ぼし、またどのような成果を生み出したのかを、彼の著作を参考としながら、試みに検討してみたい。

なお拙稿は、朱鶴齡とその學術、および彼が生きた時代の學術的特性に對する研究を進行する上での基礎的な考察のひとつであり、今後より詳細な研究へと發展させていくことを愚考している。

一、朱鶴齡の交遊關係

朱鶴齡の交遊關係については、上述の先行研究の中で幾分かの整理が施されている。たとえば周金標氏は、朱鶴齡と顧炎武の交遊關係について、時系列による整理を試み、そのあらましを述べており、朱鶴齡と錢謙益とのやりとりについても同様の方法で検討を加え、兩人の間の交誼と學術的論争の推移を明らかにしている。

ここで名の擧がった顧炎武と錢謙益は、いずれも明末清初を代表する文人であり、學者である。また顧炎武は、滅び行く王朝たる明朝への節を持した「遺民」として名

高く、他方で錢謙益は、新たな支配者となった清朝に仕えた「貳臣」として廣く知られている。異なる二つの立場にある彼らと、朱鶴齡との交遊を整理することが、明清初期の世相や學界を理解する上で一助となることはいうまでもないだろう。

また、朱鶴齡と交遊のあった文人について、先掲の王建濤氏は、以下の學者達の名を提示している。

顧有孝（一六一九～一六八九）、顧樵（一六一四～？）、陳啓源（？～一六八九）、徐白（生没年不詳）、史玄（？～一六四八）、陳三島（一六二四～一六六〇）、魏耕（一六一四～一六六二）、朱士稚（一六一四～一六六一）、張宗觀（生没年不詳）、徐晟（一六一五～一六八四）、陳瑚（一六一三～一六七五）、葉襄（？～一六五五）、葛芝（一六一八～？）、董守諭（一五九六～一六六四）、爰丹生（一六〇九～一六七八）、趙瀚（生没年不詳）、周安（？～一六八〇）、俞南史（生没年不詳）、吳祖修（一六三八～一六九四）、葉仲韶（一五八九～一六四八）、方文（一六一二～一六六九）、魏禧（一六二四～一六八一）、沈壽民（一六〇七～一六七五）、包捷（一六一〇～一六五二）、歸莊（一六一三～一六七三）、姜垞（一六〇七～一六七三）、姜垓（一六一四～一六五三）、吳茂申（生没年不詳）、朱用純（一六二七～一六九八）、沈自南（一六一二～一六九一）、周永年（一五八二～一六四七）、金俊明（一六〇二～一六七五）、王光承（一六〇六～一六七七）、王烈（生没年不詳）、顧夢麟（一五八五～一六五三？）、釋讀微（一五八七～一六五六）、馮班（一六〇二～一六七一）、孫永祚（生没年不詳）、徐枋（一六二二～一六九四）、黃宗羲（一六一〇～一六九五）、顧炎武（先掲）、徐崧（一六一七～一六九〇）、熊開元（一五九九～一六七七）、王時敏（一五九二～一六八〇）、祁理孫（一六二五～一六七五）、祁班孫（一六三二～一六七三）、張養重（一六一七～一六八二）、李實（一六一七～一六八二）、杜濬（一六一一～一六八七）、倪之煌（生没年不詳）（ここまで「遺民」）、錢謙益（一五八二～一六六四）、吳偉業（一六〇九～一六七一）、曹溶（一六一三～一六八五）、王士祿（一六二六～一六七三）、王士禎（士禎、一六三四～一七一）、徐乾學（一六三一～一六九四）、徐秉義（一六三三～一六七一）、徐元文（一六三四～一六九一）、吳興祚（一六三二～一六九八）、吳綺（一六一九～一六九四）、董閏（生没年不詳）、許三禮（一六二五～一六九一）、葉舒崇（一六三八～一六七八）、汪森（一六五三～一七二六）、陸世楷（一六二六～一六九〇）、錢中諧（一六三五～？）、吳之紀（一六二九～？）、唐甄（一六三〇～一七〇四）（ここまで「官吏・貳臣」）、葉奕苞（？～一六八七）、朱彝尊（一六二九～一七〇九）、計東（一六二五～一六七六）、汪琬（一六二四～一六九〇）、潘耒（一六四六～一七〇八）、吳兆寬（一六一四～一六八〇）、吳兆騫（一六三一～一六八四）、余懷（一六一六～一六九六）、毛奇齡（一六二三～一七一六）（ここまで「後學の名士」）、葉翼雲（一六一〇～一六九五）、黃淳耀（一六〇五～一六四五）、唐階泰（生没年不詳）（ここまで「抗清志士・先學の名士」）⁴⁵

如上の舉例からもわかるように、朱鶴齡がその人生において交わりをもった人物は現代に名を遺した人物を掲げるだけでも、相當な数になるといえよう。吳江の名士達から貳臣と呼ばれる官吏に至るまで、また、年長・年少の別にかかわらず、非常に幅の廣い交際範圍であったことが看取できる。それぞれに異なる思想的立場や主義・主張、また環境や背景の違いもあり、こうした複雑な人間関係の中で、朱鶴齡自身の思想や學問がどのように培われ、どのように變化していったのかを考察することは、容

易ではないだろう。

そこで、拙稿では考察の対象として、まず顧炎武および陳啓源を採り上げたい。顧炎武はいうまでもないが、陳啓源も詩經學の分野で後世、注視されるようになる學者であり、この兩者との交遊について検討を加えることによって、主に遺民という社會的立場から、經學という學問分野を介して、朱鶴齡がその交遊においてどのような意識をもちえたのかを明らかにできる、と思考するからである。

二、顧炎武との交遊について

顧炎武と朱鶴齡との交遊關係について検討するに先立ち、まずは顧炎武という人間について述べておきたい。

顧炎武は崑山の人、字は寧人、元來は絳という名であったが、やがて炎武と改める。周圍からは亭林先生と呼稱された。明末清初期において、明朝に義を盡くし、「遺民」として復社（政治結社のひとつ）に所屬して、反清運動を展開した。中國各地を歴遊しながらそのかたわらで學術的活動もおこない、その思想が周知されることとなる。著書として『音學五書』や『日知錄』を遺している。

さて、朱鶴齡が顧炎武と面識を持ったのは明末のころと考えられている⁹⁶が、二人が本格的に交際を始めるのは、清初の順治七年（一六五〇）に、朱鶴齡の故郷である吳江松陵で結成された驚隱詩社での活動によると推察される。朱鶴齡は顧炎武や歸莊らとともにこの驚隱詩社に所屬し、亡國を憂う文學者として、文筆による活動を續けたのである。⁹⁷ 亡國の徒であることを強く自認する顧炎武が、この朱鶴齡と親密な關係を築いたことは想像に難くない。文學研究と政治活動が、彼らを結びつけたのである。更に、當時朱鶴齡は杜詩や李義山の詩文についての研究を續けていたが、この顧炎武との邂逅が、彼の學問に對する意識を變えることとなるのである。次の一文をみてみたい。

初め文章の學を爲すも、顧炎武と友^{まじ}はるに及び、炎武、本原を以て相^{つと}勗むれば、乃ち經・注疏及び儒先の理學に湛思覃力す。（『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」）⁹⁸

これまで詩文の研究を旨としてきた朱鶴齡であるが、顧炎武が本原の學、いいかえれば、中國の傳統的學術たる經學および宋代以降に隆盛した理學に對する熱心な研究を進めていることに啓發されて、自身の學問的方向性を大きく轉換することになるのである。具體的には、「經・注疏」、つまりは『五經』とそれに対する注釋書を研究し、加えて理學についても研鑽するようになったという。文學から經學への轉向を導くほどに、顧炎武の存在は朱鶴齡にとって大きなものであったのであろう。これは例えば朱鶴齡が「徐健菴太史過訪」において「亭林は余の畏友たり」⁹⁹と述べて、顧炎武とその學術に對する敬意を周圍に隠すことなく表現していることからわかる。

また、顧炎武は、彼の著作である『日知錄』を朱鶴齡に贈呈したが、朱鶴齡はこのことを自作の五言排律「寄朱致一」の自注に記録している。¹⁰⁰このようなやりとりは決して一方的なものではなく、たとえば朱鶴齡も、自著である『尚書俾傳』を顧炎武

に贈っている。朱鶴齡は、康熙十二年（一六七三）に、友人である汪琬の助力を得て『尚書』の注釋書である『尚書俾傳』の上梓にこぎつける。彼はついに刊刻されたこの書を、當時故郷を離れていた顧炎武にあてて送付した。それは同書刊刻の喜びを分かち合うためでもあり、批正を請うためでもあったのだろうが、顧炎武は苦境の中で友人から贈られた書物を手にして、ひとしきり感激したという。^{*11}

次いで、康熙十九年（一六八〇）ごろ、朱鶴齡は自身が執筆した『春秋左氏傳』の研究書である『讀左日鈔』が上梓されることとなり、同書の既刊箇所を、顧炎武のもとへと贈り届けた。すると顧炎武は概書を一讀するや、自らが考證を續けていた『左傳』の注釋を數十條、朱鶴齡のもとへと送って寄越したのである。『讀左日鈔』はその時点で既に半分を超える箇所が刊刻されていたため、顧炎武に教示された注釋を直接に採り上げて反映することはかなわなかったが、補編として同書の末尾に配して後世の學者達に供したのである。^{*12} これらの例示から、二人の交遊關係が互いの學術的志向に起因するものであり、またそのやりとりを通して切磋琢磨し、より洗練された研究を完成させようとしていることがわかる。

このように親密な交遊を重ねた兩者であつたが、やがて顧炎武が世を去ることとなる。朱鶴齡は顧炎武の死をひどく悼み、自らひとつの詩をつくつたが、その冒頭で彼は「知交は海内にひとり亭林のみ」と述べて、「畏友」であつた顧炎武に最大の贊辭を手向けた。そしてその自注において、「亭林極めて余の『書傳』『左鈔』を推し、爲に細かに訛字を校し、以て著す所の百餘條、惠貽するを増入す」^{*13}と記録した。顧炎武が先掲の『尚書俾傳』および『讀左日鈔』を紐解き、概書を高く評價した上で、それらに校訂を加え、参考として書き付けた文章・注釋を、朱鶴齡は有難く拜受し、概書の記事として増入したというのである。朱鶴齡は亡き顧炎武を想うあまり、事の次第を示すことによって、生前に顧炎武から受けた學恩をここに表したのであろう。

顧炎武と朱鶴齡の交遊に際して、彼らに共通の知人が多かったことも付言しておきたい。例えば顧炎武の親友といわれる歸莊は、朱鶴齡の友人でもあり、朱鶴齡が歸莊と詠んだ詩も『愚庵小集』にみえる。^{*14} また、顧炎武の姻戚である徐家の三兄弟（外甥にあたる）、徐乾學・秉義・元文らは、それぞれが科舉試験に第一甲（それぞれ探花・探花・狀元）で合格したという、實に華やかな兄弟であるが、朱鶴齡は彼ら三人とも深い友誼を結んでいた。^{*15} 朱鶴齡と顧炎武に関しては、共通する友人との交流の例は枚舉に暇が無い。それは無論、復社や驚隱詩社での活動も背景に持つのであろうが、彼ら兩名は、周囲の文人達を巻き込んだ、大きくかつ緊密な學術的コミュニティを構成し、その影響を更に多くの學者達に及ぼしていたのではなかろうかと思考する。

三、陳啓源との交遊について

ここまで、顧炎武と朱鶴齡の關係について確認してきた。顧炎武は明末清初の名士であり、知己も多い人物であつた。この顧炎武に比するに、陳啓源は、交際していた友人が多いというわけでもなく、^{*16} 在世當時はその學問についてもあまり表出することがなかったように把握されている。しかしながら陳啓源は、自身にとって数少ない友人のひとりとして朱鶴齡を選び、彼と厚い交誼を結び、やがて互いの學問に大きな影響を与えあつた人物である。彼らの交遊については、拙著において幾分かの整理を試みているため、以下簡潔に概括したい。^{*17}

陳啓源は朱鶴齡との交遊について、次の様に述べている。

惟ふに朱子長孺、慨然として經を窮むるを以て自ら任じ、而して余と遊處すること最も密、持論又多く余と同じ。(『毛詩稽古編』「陳啓源後序」)^{*18}

陳啓源は朱鶴齡との非常に親密な交遊を明言しているのであるが、朱鶴齡は陳啓源について、「余、向に『通義』を爲すに、多くは陳子長發と商推して成し、深く其の據を援くこと精博なるに服す。」^{*19}として、陳啓源の學術的素養に心服していることを認めている。ここにみえる『通義』は朱鶴齡の著書『詩經通義』であるが、同書について、『清史稿』には以下のような記述がみえる。

朱子、詩の小序を掇撃すること太だ過ぐるを以て、同縣の陳啓源と諸家の説を參考し、兼ねて啓源の説を用ひ、序義を疏通し、詩經通義二十卷を撰ず。(『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」)^{*20}

詩文の分野における研究でも高名であった朱鶴齡にとっては、中國における最古の詩集たる『詩經』に注釋を附與すること、それ自體が特別なことであつたと推察する。その『詩經通義』については、陳啓源とともに考證し、また陳啓源の學説を積極的に採用したという。陳啓源もその著作『毛詩稽古編』において朱鶴齡の學説を大いに尊重していたことを自ら述べており、兩書は相補關係にあるものとされる。^{*21} そもそも陳啓源は朱鶴齡が『杜工部詩集輯注』を編んでいた頃から彼の學術活動に關與していたが、^{*22} 朱鶴齡が經學に潛心して以降はよりいっそうの幫助をするようになる。朱鶴齡が起稿した多くの著作について、共に検討し考證を加えたことを、陳啓源は次のように述べている。

故に著す所の『周易廣義』『尚書埤傳』『毛詩通義』『讀左日抄』等の書、並びに余に示すを以て、共に論定を爲す。(「陳啓源後序」)^{*23}

ここで注目すべきは、前項で顧炎武との交遊を検討した際にも名の擧がった『尚書俾傳』と『讀左日鈔』であろう。朱鶴齡との考證を介することによって、陳啓源は顧炎武と接點を持ち、經學研究においても、いわば共同作業を進めていたことになる譯である。

ここで留意しておきたいことがある。それは、陳啓源の著作『毛詩稽古編』の流布に關して「或ひと云ふ、崑山之を得、と。」という記録が存在することである。^{*24} ところがこの崑山が誰を指すのか、検討するにも史料に乏しく、これまで明らかにしえなかったのである。管見の限りではあるが、陳啓源と顧炎武には直接的な交遊の記録が見受けられない。しかしながら、彼ら兩者の朱鶴齡との交遊、およびその著作への深い關與を媒介として、少なくとも陳啓源と顧炎武とは、互いの學術的志向とその學説について、認識し、理解していたのではなからうか。

この他、『毛詩稽古編』については、文人として、また貳臣として知られる曹溶が、その學術的價値に注目して複寫本を入手していたのであるが、^{*25} 彼もまた朱鶴齡と交遊のある人物であり、かつ顧炎武の知己のひとりだったのである。朱鶴齡を中心として形成された學術的交流圈の中で、學者達それぞれの學説がある種の共通理解となつたこと、そして朱鶴齡の著作がそうであつたように、それぞれが助け合い、また互い

の學問を高めるために、各々の考えを文章として發表し、それが様々な形で融通され、流通していったことを示唆するのではなかろうか。あくまでも推測の域を出ないことではあるが、この點については、今後とも考察を重ねていくことを付言しておきたい。

小結

ここまで、朱鶴齡の交遊關係について、その著作への關與について留意しながら、顧炎武と陳啓源を採り上げ、整理と考察を試みた。如上の検討から、まず、朱鶴齡が顧炎武の影響を受けて、文學から經學へと、その研究對象を推移していったことが確認できた。陳啓源は朱鶴齡の長年の友人であったが、彼が經學研究に没頭するようになると、更なる助力をしたことも明らかとなった。文學を表現の手段とする復社や詩社において、文人たる朱鶴齡が活躍したであろうことはいまでもないが、そこで形成された交遊關係が、やがて朱鶴齡を經學研究へと導いていったことは興味深い。

顧炎武と陳啓源に對する整理を経て、筆者は朱鶴齡を中心とする文人・學者たちの交遊關係が、單なる個對個の關係性を超え、朱鶴齡自身や彼らの著作・學說等を媒介として、多層にわたる相互交流を生み出していたのではないかと推察する。しかしながら、朱鶴齡は拙稿第一節の王氏の例示のように、あまりにも多くの知己を持つため、それら友人達との關係性について、拙稿では確認し盡くせていないのも事實である。

この他、たとえば『杜工部集輯註（輯註杜工部集）』の「同郡參訂姓氏」をみると、該書の編集および校訂に助力した百九十七人もの學者が列擧されているのだが、彼らの全てが、朱鶴齡と何らかの交遊關係にあったことは疑いようがない譯である。その全てを採り上げることは難しいが、稿を改めて、新たな考察對象、例えば貳臣である錢謙益や曹溶らに注目し、新たな角度から検討を加えることにより、朱鶴齡を中心とした學者たちの交遊と、その特色を今後いっそう明らかにしていきたい。

朱鶴齡の、こうした廣範にわたる交遊關係は、地域社會におけるコミュニティの構成はもちろんのこと、復社等における關與を基板とし、交際を重ねていく中で、學術研究上の相互發展關係へと推移しながらできあがったものである。朱鶴齡は、そしておそらくは顧炎武も同様に、當時の文人コミュニティの中における中心人物として活發に機能し、多くの學者達を有機的に結びつけていたのではないだろうか。たとえば陳啓源などは、經學研究に没頭するあまり、人とあまり交わることもなかったため、當時の學界ではその名をあまり廣くは知られていなかった人物と考えられるが、その著作『毛詩稽古編』の存在と學術的價值が徐々に浸透していったのも、おそらくは、文筆や文學を活動手段とする結社の人間關係に端を發する、學者たちの有機的なつながりが作用した結果のひとつなのであろう。こうした波及力に鑑みても、文學・經學の別に關わらず、朱鶴齡が當時の學界で果たした役割は、大きなものであったと理解すべきであろう。

*1 朱鶴齡の生没年については、拙稿「朱鶴齡に関する基礎的研究－その人物と著述活動について－」（旭川醫科大學紀要、一般教育、第 30 号）p19-21「二、生没年について」における考察を参照されたい。

*2 たとえば『清史稿』儒林傳に次のようにみえるが、ここから、朱鶴齡が學問に打ち込む様子や、その眞摯な姿勢がうかがわれよう。

朱鶴齡、字長孺、吳江人。明諸生。穎敏嗜學、嘗箋注杜甫・李商隱詩、盛行於世。鼎革後、屏居著述。晨夕一編、行不識途路、坐不知寒暑。人或謂之愚、遂自號愚菴。（『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」）

*3 『清史稿』同上の箇所にも見える、以下の一文を参照されたい。

著愚庵詩文集。……以易理至宋儒已明、然『左傳』『國語』所載占法、皆言象也、本義精矣、而多未備、撰『易廣義略』四卷。以蔡氏釋書未精、斟酌於漢學・宋學之間、撰『尚書埤傳』十七卷。以朱子掇擊詩小序太過、與同縣陳啟源參考諸家說、兼用啟源說、疏通序義、撰『詩經通義』二十卷。以『胡氏傳春秋』多偏見鑿說、乃合唐・宋以來諸儒之解、撰『春秋集說』二十二卷。又以杜氏注左傳未盡合、俗儒又以林氏注索之、詳證參考、撰『讀左日鈔』十四卷。又有『禹貢長箋』十二卷、作於胡渭『禹貢錐指』之前、雖不及渭書、而備論古今利害、旁引曲證、亦多創獲。（同上）

文中にみえる『易廣義略』および『春秋集說』は、既に散佚しており、その内容に關しては不詳である。それでも彼の著作は相當数が現存しており、また、たとえば昭代叢書（一三四、補編・壬集）所收『愚菴雜著』に對して、沈懋惠が附した跋文には次の様な記述がみえる。

吾邑朱愚菴先生、著書四十餘種。（『愚庵雜著』沈懋惠跋）

この記事に依れば、朱鶴齡の著作は四十種類を超えるという。その實状については不明と言わざるを得ないが、朱鶴齡が盛んに執筆活動を進めていたことは、これらの例示からも大いにうかがえるだろう。

*4 周金標氏は朱鶴齡に關する多くの論考を發表しているが、拙稿では特に「顧炎武與朱鶴齡交往考論」（『江南大學學報（人文社會科學版）』2009 年第 4 期）および「錢謙益與朱鶴齡交往考論」（『江南大學學報（人文社會科學版）』2010 年第 1 期）を参照した。また、朱鶴齡の交遊關係について、秦輝氏『朱鶴齡及『李義山詩集注』研究』（西南大學碩士論文、2010 年 4 月、p7-15、第二節「交游考」）や、王建濤氏『朱鶴齡詩歌研究』（廣西師範大學碩詩論文、2012 年 4 月、p7-19、第一章第二節「朱鶴齡的交游」）、また、高洪韜氏『朱鶴齡『愚案小集』存詩校注』（廣西大學碩士論文、2011 年 5 月、p7-14 第一章第三節）、樂翔氏『朱鶴齡『愚案小集』研究』（安徽大學碩士論文、2011 年 5 月、p10-14、第一章第二節「朱鶴齡的交游」）および施馬琪氏『朱鶴齡『詩經通義』文獻學研究』（廣西大學碩士論文、2012 年 5 月、p8-10、第一章第一節「朱鶴齡與個人的交游情況」）等の論考も参照されたい。

*5 注 4 にて先掲の王建濤氏『朱鶴齡詩歌研究』（廣西師範大學碩詩論文、2012 年 4 月、p7-19、第一章第二節「朱鶴齡的交游」）を参照されたい。王氏は當該論文で、ここに挙げた人物について簡潔な整理・分類（遺民・貳臣の官吏・その他朱鶴齡の先後の學者）を施し、朱鶴齡の幅廣い交遊關係を俯瞰した上で、その人格が高潔で寂寞の思いを感受する名士であつた、と結論づけ、また様々な事象に起因する彼の複雑な思想性について言及する。筆者はこれらの例示から朱鶴齡の人格まで読み取ることは難しいと考えるが、しかし、變動期である明末清初を生き、異なる思想信條を持つ、様々な年代の文人・學者・名士達と交遊しえた、恐らく數少ない學者の一人であつたことは

間違いないだろう。

*6 たとえば、注 4 にて先掲の周金標氏「顧炎武與朱鶴齡交往考論」（『江南大學學報（人文社會科學版）』2009 年第 4 期）、p82-83 を参照されたい。周氏は、朱鶴齡と顧炎武兩者の共通の友人である方文・吳偉業・王光承ら復社の人士達が交誼を結んだ時期から、明末に朱鶴齡と顧炎武が面識を持ったことを推察している。

*7 驚隱詩社における朱鶴齡の文學活動については、周于飛氏「驚隱詩社“性情”論」（『廈門廣播電視大學學報』、2012 年第 2 期、5 月）を参照されたい。

*8 原文は次のとおりである。

初爲文章之學、及與顧炎武友、炎武以本原相勗、乃湛思覃力於經注疏及儒先理學。
（『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」）

*9 『愚庵小集』卷二所收の五言詩「徐健菴太史過訪」にみえる。その冒頭で、朱鶴齡は次のように顧炎武を評している。

亭林余畏友、卓犖儒林奮、貫穿經史籍、事事精考證。

ここからも、朱鶴齡が顧炎武の廣汎な學問を總體的に捉え、非常に高い評價を與えていたことがわかる。

*10 『愚庵小集』卷四所收「寄朱致一」の一句「書傳旅食人」に、朱鶴齡は次のような注釋を遺している。

寧人遠寄『日知錄』。

*11 事の顛末は、『顧亭林詩文集』卷五、三一八「朱處士鶴齡寄『尚書俾傳』」に詳しい。以下、参照のために提示する。

昔我適濟南、曾過伏生祠。青山對虛楹、零落寒高枝。精靈竟何在、再拜空階墀。迫怵秦火焚、豈意逢漢時。此書立博士、天下亦一治。嗟彼九十翁、俟河未爲遲。不厭文字譌、百王賴著龜。後人失其傳、巧文患多師。忽見吾友書、一編遠來貽。緬想江上村、弦歌類齊淄。白首窮六經、夢寐親皋伊。百家紛綸說、爬羅殆無遺。論及禹貢篇、九州若列眉。上愁法令煩、下慨淳風衰。君今未大耋、正可持綱維。煙艇隔吳門、臨風苦相思。爲招陽鳥來、寄此懷人詩。

*12 『讀左日鈔』「凡例」に、朱鶴齡は次の様に記している。

亭林顧先生去秋自華陽寄與『左傳』注數十則、析疑正舛、皆前人未發、時此書已刻逾半、不及纂入。間取三傳三禮注疏閱之、尚多可錄者、因復綴緝、與亭林所貽匯爲二卷、附之卷末。

*13 『愚庵小集』卷五所收の七言律「歲暮雜詩六種」五に、次の様にみえる。

知交海內一亭林、避爵飄然太華陰。久別芝顏成北客、時貽帳祕勝南金。
龍蛇厄至誰能贖、山水人亡遂絕音。書種後來可得繼、夢迴枯眼淚霑霑。

同詩に朱鶴齡が附した自注は次のとおりである。

亭林極推余『書傳』『左鈔』、爲細校訛字、以所著百餘條、惠貽增入。

*14 『愚庵小集』卷四所收の五言律「詠虎丘宋菜圃玉蘭和玄恭（目錄には「詠虎丘宋菜圃玉蘭和玄恭砥之」とみえる）」を参照されたい。本文は以下の通り。

琪樹倚禪房、瑤光度世長。豈因通月魄、常自試雲粧。玉佩臨風舞、珠塵襯日芳。年年艷陽候、流素照空王。

*15 朱鶴齡と崑山徐氏の三兄弟との交遊について、例えば徐乾學は「徐健菴太史過訪」（『愚庵小集』卷二所收、五言古）等、徐秉義は「送徐果亭太史還朝三首」（『愚庵小集』卷六所收、七言絕句）等、徐元文は「垂虹亭過徐太史公肅舟中」（『愚庵小集』卷五所收、七言律詩）等の詩からその様子をうかがうことができる。

*16 『愚庵小集』卷二所收の五言古詩「同茂倫・樵水・長發・庶其小集介白齋中得落字」に鑑みるに、朱鶴齡と顧有孝・顧樵・陳啓源・徐白らの間には友誼が結ばれていたと考えられる。これは陳啓源が他者と交わったことを示す、数少ない例のひとつで

ある。

*17 朱鶴齡と陳啓源の交遊関係については、拙著『陳啓源の詩經學』第三章（札幌：北海道大學出版會、北海道大學大學院文學研究科研究叢書十八、2010年3月）を参照されたい。

*18 原文は次のとおりである。

惟朱子長孺、慨然以窮經自任、而與余遊處最密、持論又多與余同。（『毛詩稽古編』「陳啓源後序」）

*19 原文は次のとおりである。

余向爲『通義』、多與陳子長發商榷而成、深服其援據精博。（『毛詩稽古編』「朱鶴齡序」）

*20 原文は次のとおりである。

以朱子掊擊詩小序太過、與同縣陳啓源參考諸家說、兼用啓源說、疏通序義、撰詩經通義二十卷。（『清史稿』卷四八〇、列傳二六七「儒林一」）

*21 『詩經通義』と『毛詩稽古編』の相補関係については、注 16 先掲の拙著、第三章を参照されたい。

*22 順治十四年（一六五七）に擱筆された『杜工部詩集輯注』の参訂者の一人として、同書に附された「同郡参訂姓氏」の中に、「陳長發啓源」の名が確認できる。

*23 原文は次のとおりである。

故所著『周易廣義』『尚書埤傳』『毛詩通義』『讀左日抄』等書、竝以示余、共爲論定。（「陳啓源後序」）

*24 該當箇所について、次の一文を参照されたい。

稷既卒業、爲記其前後、所借鈔之帙、凡有二、其一留禾中。司農歿後、子彦棧登第。書未散。或云崑山得之。已一即此、其原本二、先生手筆也。藏存耕堂。合四本。（『毛詩稽古編』「趙嘉稷序」）

*25 先掲拙著、第三章を参照されたい。以下、曹溶が『毛詩稽古編』を所藏した経緯を簡述する。陳啓源の弟子である趙嘉稷が、『毛詩稽古編』の校正に際し、藏書家の曹溶が所藏する宋版・元版を参照すべく訪問した際に、曹溶は『毛詩稽古編』を譲り受け、私塾に收藏したのである。

※拙稿は、平成26年度科学研究費補助金・若手研究（B）「明清における文學と經學の相關をめぐって－朱鶴齡の基礎的研究－」（課題番號 25770132）の研究目的を達成するために作成された。また、拙稿に關する版本資料調査は、平成26年度科学研究費補助金・基盤研究（B）「日中校勘學の發展と相關をめぐる複合的研究」（課題番號 23320009）のもとで行われた。これら當該研究計畫の研究成果の一部であることをここに付言する。

（えじりてつじょう 經學・詩經學）